

萩原健一准教授

(映像メディア)

～メディアと人の関係をテーマに～

初学者がコアを学べるプログラムを

僕の生まれは山形です。その後、東京、岐阜、山口と移動し、今は愛知にいます。山口では、山口情報芸術センターという複合文化施設で、メディアアート作品の記録撮影や滞在アーティストの技術支援などを行っていました。現在は愛知淑徳大学という私立大学で働いています。この大学は秋美のように美術大学ではなく、社会学の一つとしてメディア、テレビ、映画、建築、小説などを広く浅く経験するカリキュラムになっています。

そこで行っているのが、映像メディアを用いた創造教育プログラムの開発です。初めてカメラを持ったり映像を撮ったりする人が、垣根を超えてモチベーションを落とさず、コアな部分を学ぶことができるかというテーマで取り組んでいます。

薄れた光の存在を見つめ直す

大学の写真実習として、塩化ビニールを使い、自分の取った写真に凹凸をつけて立体感のある写真展を行いました。制作の流れとしては、数十枚の写真を使いながら写真の光の位置を把握して、



木片やスチロールを使った工作で手作りの3DCGのようなものを作るという体験をさせました。こうして作った写真を集めて展覧会を開催したのです。写真がアナログからデジタルに変わったことで、光の存在が薄れたとも言われていますが、こういう手法で改めて光を見つめ直すことが、今のデジタルでできる写真の授業のあり方なのではないかという問題意識から提案した授業手法でした。

映像を動かし想像力や観察力を喚起

次は、廃園になった保育園の園児たちが書いた落書きや残した壁画やポスターなどを活用し、その場でアニメーション化して動かすというプログラムです。



過去の園児たちが描いたものを、自分たちが動かすという行為を通じて、想像力や観察力を喚起するというテーマで行った授業でした。

自動生成された歌詞でカラオケビデオ

ユア・ソングという実習授業では、インタビューしたテキストからJポップ風の歌詞を自動生成し、学生がその歌詞にあったカラオケビデオを作るという試みを行いました。Jポップで歌われる「愛」「家族」という言葉の出現アルゴリズムのように、街頭インタビューに登場する言葉を「JPOP 風に」並べてくれる歌詞ジェネレーターを外部のプログラマーとコラボして用意しました。できた歌詞と学生の感性ですごく個人的なビデオを作るという経験ができました。

おばあちゃんの日記が光の空中版画に

これは光の三原則の原理を理解する授業で、長時間露光の機能を使い、空中に光の版画を作りながら、RGBの原理を理解してもらうという内容です。

映像のストーリーは、そこに住んでいるおばあちゃんが昔書いた日記やエッセイをベースとしています。



秋美でも、様々な授業形態を提案しつつ、ワークショップを行いながら授業を進めていきたいと考えています。

昔はなかった「自撮り」への違和感

もう一つの軸になっている個人的な研究としては、映像メディアと身体の振る舞いがあります。この研究は、言わばプリクラに入ってから30秒間を記録するもので、撮影機械を自作したうえで、動画ポートレートを作品化しながら、現在も取り組んでいます。きっかけは、「自撮り」で撮られた写真に対する違和感です。「昔はこうした表情はなかったのでは」という疑問を持ち、自撮り機能が生み出すキメ顔など、自分を見つめる視線に関心から、セルフポートレートができるまでを動画に残す活動も続けています。

模倣と伝搬による文化の生成

3年前に秋田の金子家住宅で、秋田音頭をテーマにしたインスタレーション作品を制作しました。これは、映像で撮影した前の人の動きをゆっ

くり再生することができるソフトを開発してもらい、その映像を人から人へつなげていくことでどのような変化が生まれるのかを表現していたものです。



同様のことが、各地の催事様式や踊りの形の伝播するようすに重ね合わせて考えることで、何かが見えてくるのではないかという仮説で行ったプロジェクトでした。

メディアと向き合う人の姿を作品に

以上のように、僕は新しいメディアができた時に生まれてくる人の振る舞いや仕草に興味があります。それを浮かび上がらせる装置を開発し、記録することで、作品として浮かび上がらせることを研究の軸に置いています。

秋田でも、多くの分野の先生・学生さんと様々な活動をしながら幅を広げていきたいと考えていますので、よろしくお願いします。